

訳注『研志堂詩鈔』選（三）

塩見邦彦

（鳥取大学名誉教授・鳥根大学元教授）

摘要

正牆適處は鳥取城下で文政元年（一八一八）に生をうけ、明治八年（一八七五）に亡くなった武士である。と同時に漢詩人として活躍した人物であり、この時代において傑出した詩人でもある。ここに数回にわたって、彼の詩集『研志堂詩鈔』の選訳及び注釈を試みる。彼は詩人の心と画人の心とをもつて、自然を見たのであつて、結果としてそれが漢詩という世界に結実した。そのために、唐詩・宋詩の作風に学んだことを、実証的に説明する。

キーワード：正牆適處、研志堂詩鈔、幕末、明治、鳥取、漢詩

梅花 梅の花

雪霜堆裏絶纖塵	雪霜の堆裏 纖塵を絶し
未値孤山真賞人	未だ孤山の真の賞する人に値（あ）わず
豈向春園伍群卉	豈に春園に向（あ）りて 群卉に伍せん
斷橋茅屋舊精神	断橋 茅屋 旧精神
一別家山山後花	一たび別る 家山 山後の花
客居無地種梅花	客居 地の梅花を種うるなし

書窓纔挿瓶中看	書窓 纔かに瓶中に挿して看る
却笑隣花是厄花	却って笑う 花を隣れむは 是れ花を厄（くる）しむるを

緩曳吟筇趁夕暉	緩（ゆる）やかに吟筇を曳き 夕暉を趁（お）う
村家寂寂兩三扉	村家 寂寂として 兩三扉
溪山一路尋梅去	溪山 一路 梅を尋ねて去れば
滿袖香雲掃不飛	滿袖の香雲 掃けども飛ばず

【詩題】梅の花(其の一)

【大意】雪や霜に埋れた中で細かい塵を断ち、一つの山の中で本当に自分を愛でてくれる人に出会わない。春の園の中で多くの草と並んでいるが、途切れた橋、茅葺きの家、そのような中でこそ梅は真価を発揮するのだ。

【語釈】○孤山真賞人―西湖の畔の孤山で梅と鶴を友として暮らしたという宋代の林逋のこと。○向―「在」と同じ。○断橋―壊れ落ちて渡れぬ橋。西湖の断橋も意識するか。

【詩題】梅の花(其の二)

【大意】一度故郷を離れたが、山の裏の梅の花はどうなっているだろう。寓居に梅の木を植える土地もなく、私は窓辺の花瓶に梅花を投げ入れて見るだけだ。梅花を憐れんでも逆に花を苦しめているのではないかと自嘲してしまふ。

【語釈】○家山―故郷。故山。○纔―少し。わずかに。

【詩題】梅の花(其の三)

【大意】ゆっくりと杖をつきながら詩を吟じ、夕日を追って歩いてゆく。村の家々はひっそりとして二三軒の家が見える。山も谷も越えて梅が咲いている所を尋ねれば、我が衣に香りが満ち、振り払っても消えそうにない。

【語釈】○香雲―「香りの雲」であるが、ここでは「梅が雲のように群がり香りを放っていること」であろう。

蓮 蓮

微風細雨送荷香 微風 細雨 荷の香を送り
貪看跳珠坐晚涼 跳珠を貪り見て 晚涼に坐す
翠蓋满地重且疊 翠の蓋は池(地)を満し 重なり且つ疊なわる
寸波何處著鴛鴦 寸波 何れの処にか 鴛鴦を著せん

【詩題】蓮について

【大意】微かな風と細かい雨が蓮の香りを運んでくる。蓮の葉の上で転げる水滴を坐って見ていると、夕暮れの涼しさが感ぜられる。緑色の蓮の葉が池を満たして重なり、わずかの波でも立てば、ここにオシドリを落ち着かせるのだろうか。

【語釈】○重且疊―重ねる。重なる。○地―池の字の誤刻であろう。

蘭 蘭

九畹春回抽嫩碧 九畹 春回り 嫩碧を抽し
佳人長欲托幽僻 佳人長えに幽僻を托せんと欲す
芳根縱得移玉階 芳根は縦(たと)い玉階に移すを得れども
不若深林伍竹石 若かず 深林に 竹石に伍するに

幾歳山林盟不寒 幾歳 山林 盟して寒からず
松交竹友境方寬 松の交わり 竹の友として境 方に寬し
恐佗開落關君意 恐る 佗の開き落ちるは君の意に關る
且寫芳根画裏看 且つ芳根を写して画裏に看ん

【詩題】 蘭について(其の一)

【大意】 『楚辭』で詠われたように「九畹」に春が来て、蘭も若芽を出した。美人は永遠に片田舎に身を托そうとしてる。芳しい根はもし階段の下に移したとしても、深林の竹や石と並べられるのには及ばない。

【語釈】 ○九畹―「畹」は十二畝。「余既滋蘭之九畹兮」(『楚辭』離騷)「滋蘭」は「蘭を滋(う)える」こと。○幽僻―片田舎。辺鄙の地。○玉階―きざし。

【詩題】 蘭について(其の二)

【大意】 蘭は何年も山林と約束をして、決して誓いの気持ちがつめたくなることはない。松と竹とを友としてその心境は広やかである。咲き散るのは蘭・お前の心次第だと心を碎いて心配しているが、芳しい根を描いて絵の中に留め、ゆつくりと眺めていよう。

【語釈】 ○盟―きわめて親しい交わり。蘭は「金蘭の交わり」として使用される(『易』繫辭上)参照。○寒―盟約が薄らぐこと。

二月中旬將歸鄉題姬城寓居壁

二月中旬まさに郷に帰らんとし
て姬城の寓居の壁に題す

長鋏青春歌更頻 長鋏の青春 歌うこと更に頻なり
高堂白髮憶雙親 高堂の白髮 双親を憶う
家山殘雪梅應健 家山の殘雪 梅は応に健やかなるべく
客路東風柳已新 客路 東風 柳已に新たなり
半世未添稽古力 半世 未だ稽古の力を添えず

十年猶作遠遊人 十年 猶お遠遊の人と作る

蕭然明日花朝雨 蕭然たり 明日は花朝の雨なるも
欲逐飛鴻歸北因 飛鴻を逐いて北因に帰らんとす

【詩題】 二月中旬、故郷に帰ろうとして姫路城下の仮寝の宿の壁に題して

【大意】 栄達を求めた若い頃、詠うことはもつと盛んであった。今や両親は白髪になり、二人が気がかりだ。故郷の残雪を思い、また梅の変わらぬ姿を憶う。旅路では東風が吹き、柳は新芽を出しているだろう。盛りを過ぎた今では詩の稽古する力もともなわれないし、十年もの間流浪の人生を歩んできた。ひっそりと静かな明日は二月の雨の日であらうが、飛ぶ鴻を追いながら北のかた、鳥取へと帰ろう。

【語釈】 ○長鋏―「鋏」はつるぎ。孟嘗君の客・馮驩が待遇の悪さを歎じて長鋏を弾じて「長鋏歸來乎」の歌を詠じたという故事に基づく語。「彈鋏」とも。栄達を求める意に用いる。○青春―青年。「容色如青春」(李白詩)。○高堂―父母をいう。○家山―故郷。故山。○半世―半世を過ぎた人。盛りを過ぎた人。生涯の半分。半生とも。○蕭然―ひっそりとして静かな様。○花朝―陰曆二月の異称。○北因―北の因州。鳥取のこと。

夏日偶成 夏日偶成

庭樹陰陰綠更添 庭樹 陰陰として 緑更に添(ま)し
連朝霖雨未知炎 連朝 霖雨 未だ炎を知らず
棘牟幾處秋方熟 棘牟 幾處 秋 方に熟し

一抹黄雲入亂鎌 一たび黄雲を抹して 乱鎌を入る

冬夜作 冬夜の作

【詩題】夏の日、たまたまできた詩

【大意】庭の樹は暗く茂り、緑色がさらに増えた。毎朝続いている長雨にまだ炎暑の気配すらない。大麦が所々に稔り、まさに麦秋の時を迎えた。一筆で書いたような黄雲(麦)をやたらと鎌で刈るのだ。

雪埋庭樹月將晴 雪は庭樹を埋め 月は將に晴れんとす
一色乾坤徹底清 一色の乾坤 底を徹して清し
冰柱倒懸玉三尺 冰柱は倒懸し 玉三尺
簷端点滴寂無聲 簷端の点滴 寂として声なし

【語釈】○陰陰―暗い様。○霖雨―三日以上降り続く雨のこと。○麩牟―大麦のこと。○一抹―ひとりで。一刷。

【詩題】冬の夜の作

題自画 自画に題す

一溪涼雨一蓑風 一溪の涼雨 一蓑の風

【大意】雪は庭の樹を埋め尽くし、月は今まさに顔を出そうとしている。見渡す限りの雪の色はあくまでも隅々まで清い。ツララは軒先に下がり、さらさらと三尺もの長さであるが、軒先からはぼたりぼたりと落ちる音以外、深と静まりかえっている。

峰態巒容半欲空 峰態 巒容 半ば空ならんとす

【語釈】○冰柱―氷の柱。ここは「ツララ」のこと ○徹底―隅々まで行き届くこと。○点滴―ぼたりぼたりと落ちる雫のこと。

日暮漁翁未収釣 日暮 漁翁 未だ釣を取めず

扁舟留在亂雲中 扁舟に留まりて 乱雲の中に在り

題梅澹卿画山水卷後 梅澹卿の画山水卷後に題す

【詩題】自分の絵に題して

【大意】谷川に降る雨は涼しく、蓑に風が吹きつける。高い峰や円い峰が空半分を占めている。夕暮れ、漁師はまだ釣竿をしまわずに、小船に留まって乱れた雲の中にたえずんでいる。

【語釈】○扁舟―ささやかな舟。小舟。○峰態巒容―峰巒の容態。高い峰と丸い峰の姿。

煙村遺墨雨中圖 煙村の遺墨 雨中の図
題詠交遊半有無 題に交遊を詠むも 半ば有無
持去夜窓挑燭看 持ち去りて夜窓 燭を挑げて看る
山光水色更模糊 山光 水色 更に模糊たり

【詩題】梅澹卿の「画山水卷」の後に題して

【大意】煙村(梅澹卿)の残された筆跡の雨中の図。題には交遊を詠んでいるが、消えかかっている所と残っている所とが相半ばしている。

此の図巻を持ち帰り夜の窓辺で灯を掲げて見るのだが、山の景色も水の色もぼんやりと見えるだけ。

【語釈】○梅澹卿（?）鳥越烟村。江戸後期の画家。備前岡山藩士。天保末から弘化年間に活躍。名は霖。後に澹。字は澹卿。通称は仙蔵。号は烟村。別号に梅圃。○遺墨―故人の筆跡。死後に残った書画。○有無―有る所と無い所と。○山光―山の景色。山色。○模糊―模糊。はつきりしない様。ぼんやりとした様子。

街川途上 街川途上にて

角角雞聲何處家 角角たり鶏声 何れの処の家か
竹籬茅屋月將斜 竹籬 茅屋 月將に斜めならんとす
不堪多露衣裳濕 堪えず 露多く衣裳湿るに
満野秋風香稻花 満野の秋風 稻花を香らす

【詩題】街川途上で

【大意】鳥の鳴き声が聞こえたが、一体どこの家であろうか。竹の籬、かやぶきの屋根に月は傾きかけている。露が多くて着ているものもすっかり湿ってしまったが、原野に満てる秋風が稻の香りを運んでくる。

【語釈】○街川―町川のことをこのように表現したか? もしそうなら岡山県勝央町・奈義町近辺を言う。○角角―雉の鳴き声。ここでは鶏のことか。

中元和桂屋老人山莊即事韻

中元に桂屋老人の山莊即事の韻に和す

文墨何縁住此莊 文墨 何に縁あつてか此の莊に住む
與君幸占一書房 君と幸いにも占む 一書房
晚餐有酒同三酌 晚餐は酒有り同に三酌
睡起思茶乞半湯 睡より起きて茶を思い半湯を乞う
嶋影模糊纏殘雨 嶋影は模糊として残雨を纏い
蟲聲斷續欲斜陽 虫声は断続して斜陽ならんとす
胡床相對梧桐底 胡床に相対す梧桐の底
領略秋風多少涼 領略す 秋風 多少の涼

【詩題】中元節に桂屋老人の「山莊即事」の韻に和韻した詩

【大意】詩文や書画で、どうしてこの山莊に住んでいるのであろう。君とは幸いにもこの書齋を占有することができた。夕餉には酒が出て共に三杯。眠りから覚めて茶が欲しくなり茶碗半分をお願いする。ここから見える島影はぼんやりと残んの雨を纏い、虫の声は断続的に聞こえて、夕陽が傾こうとしている。桐の木の下で床几に相對して腰掛け、秋風の涼しさを独占する。

【語釈】○中元―中元節。陰曆七月十五日。○桂屋老人―不明。○和韻―他の詩に応答するとき同じ韻の字を韻に踏んで作詩することを言う。○文墨―詩文・書画等の技。○書房―書齋のこと。○領略―意義を悟る。納得する。了解する。

秋郊所見 秋郊所見

坡稻秋初熟 坡稻は秋の初に熟し
黄雲未上鎌 黄雲は未だ鎌に上らず
鼓聲村社晚 鼓声 村社の晩
落日照青帘 落日 青帘を照らす

【詩題】秋の郊外での見るところ

【大意】斜めになった稲穂は初秋に熟すが、見渡す限り稲はまだ刈り取る時期ではない。暮れにどこからともなく聞こえてくる村祭りの太鼓の音。夕日の中に酒屋の旗がはためいている。

【語釈】○黄雲―黄熟した穀物の実りを雲に比して言う。○社鼓―神社の太鼓。○青帘―酒屋の看板旗。酒旗。

田家秋興 田家秋興

山村秋社後 山村 秋社の後
家醸近如何 家醸 近ごろ如何
水落溪航斷 水は落ちて溪航断たれ
林疎野鹿過 林は疎にして野鹿過ぐ
微霜染籬菊 微霜は籬菊を染め
寒雨入農蓑 寒雨は農蓑に入る
處處春歌急 處處 春歌急に
圃場遺秉多 圃場 遺秉多し

【詩題】田舎屋の秋の趣(鳥取大学所蔵書軸では「田園秋興」に作る。(一)の写真、九二頁(189)下段参照のこと。この書を書いた時に「田園」と直したか?)

【大意】山村の秋祭りの後、家で醸した濁り酒はこの頃いかがでしょう。川の水は水かさが落ち、谷川を航行するのも困難だし、林はまばらでその中を野鹿が通り過ぎてゆく。わずかの霜が籬の菊を黄に染め、寒々とした雨は農作業中の蓑に降り込んで来る。あちこちで臼でつく歌声が急に聞こえだし、野菜を植えようとする畑には、稲束がたくさん落ちたまままだ。

【語釈】○圃場―野菜を植える畑。○春歌―臼で米をつく時に歌う歌。○遺秉―落ちて忘れられた稲の束。田の傍に置き忘れられた稲束。

江村晚雪 江村の晩雪

滿天風雪捲枯蘆 滿天の風雪 枯蘆を捲き
崖樹無枝着暮鳥 崖樹 枝の暮鳥を着くるなし
漁艇歸來難繫得 漁艇 帰来 繫ぎ得難く
江村一路白模糊 江村 一路 白模糊たり

【詩題】江村の夜の雪

【大意】空に滿つ風雪が枯れた芦を捲き上げ、岸辺の木々には枝がなく、藪を探す鳥は取り付く島もない。漁師の船も帰ってきたものの舟を繋ぐ事ができず、川辺の村の道は白くぼんやりとかすんでいる。

【語釈】○歸來―帰ってから。「来」は「来る」意味ではなく、動作の移動・勧誘を表すために添えられた助辞。

將航小豆島沮風泊繪島

將に小豆島に航せんとして風に沮まれ

繪島に泊る

鳥影依稀何處天

鳥影は依稀として何れの処か天なる

孤篷片月夜茫然

孤篷 片月 夜 茫然

三更風定眠初穩

三更 風定まりて眠り初めて穩やかなり

無復鐘聲到客船

復た鐘聲の客船に到るなし

【詩題】小豆島に行こうとして風に阻まれたので繪島に宿泊した時の

詩

【大意】鳥影ははっきりとしないしどこが空やら。一艘の小舟と片割

れ月。夜は取りとめもなくぼんやりとしている。夜中に風がやみ、始

めてゆつくりと休めた。でもこの船まで鐘の音が届くこともない。

【語釈】○繪島―兵庫県淡路島北東部にある景勝地。○依稀―はつきりしない様。微かな様。○孤篷―一艘の小舟。「篷」は竹などで編んだ舟などの被い。○片月―片割れ月。○鐘聲到客船―有名な「楓橋夜泊」の詩句「夜半鐘聲到客船」を下敷きにした表現。

歸舟泊伊津洋中 歸舟伊津洋中に泊る

片帆横海問前津

片帆 海に横たわり 前津を問う

風死中流繫夜分

風は死に 中流 夜分に繋がる

倦枕夢醒天未暁

倦枕 夢は醒め 天 未だ暁ならず

篷窓幾度檢星文

篷窓 幾度か 星の文を檢する

【詩題】歸り舟が伊津湾に停泊して

【大意】半分帆を揚げた船が海に横たわり、この先の港を尋ねる。風は止んでも中流域に繋がれたまま夜中になった。寝るのに疲れ夢から覚めても空はまだ明けないので、船の窓から何度か星の美しさを観察する。

【語釈】○伊津―播磨国揖西(いっさい)郡岩見莊。最初は龍野藩領。万治元年からは讃岐国丸龜藩領。○片帆―半帆。半ば揚げた帆。○倦枕―枕に疲れる。枕に飽きる。○星文―星の現象。星のあや。

庚戌元旦 庚戌の元旦

四山残雪暎朝霞 四山の残雪 朝霞に映じ

已看紅暎上碧紗 已に看る 紅暎の碧紗に上るを

數句新詩試毫罷 數句の新詩 毫を試みて罷め

復將餘墨寫梅花 復た余墨を將(も)つて梅花を書く

【詩題】庚戌(一八五〇)の年の元旦に作る

【大意】周りの山々の残雪が朝もやに映じ、赤々とした朝日が緑色の薄衣(海)にかかるのも見た。數句の新しい詩を試筆して作り終えたと、残った墨で梅の花を描いてみる。

【語釈】○庚戌―原文「庚戌」とするも「庚戌」か。嘉永三年(一八五〇)。○紅暎―紅の朝日。○碧紗―緑色をした薄衣。海のことか。

早春散歩 早春の散歩

一村残雨帯斜暉 一村の残雨 斜暉を帯び
寸麥喬松野色新 寸麥 喬松 野色新し
吹面東風猶覺冷 面を吹く東風は猶お冷を覚え
春郊未見踏青人 春郊 未だ青を踏む人を見ず

【詩題】 浅い春の散歩

【大意】 村の残り雨が斜めに光を浴び、芽を出したばかりの麦や高い松は野の色あいが新しい。顔に吹くこち風はまだ冷たいが、春の郊外では、まだ男女が野山で遊ぶ姿を見ない。

【語釈】 ○斜暉―斜めの光。斜暉。「抱琴無語立斜暉」(蘇軾詩)。○踏青―青い草を踏んで遊ぶこと。また男女が野山で遊ぶこと。

偶成 偶成

花香柳色錦成春 花は香り 柳色 錦春と成る
幾段晴霞織得新 幾段の晴霞 織り得て新たなり
何事鶯梭追暖閑 何事ぞ鶯の梭は暖を追いて閑がしく
不同橋畔倚筇人 橋畔 筇に倚る人と同じからず

【詩題】 たまたまできた詩

【大意】 花が香り、柳の木の色が錦のような春となった。幾段にも重なった霞が新しく織り上がったかのようだ。何が鶯をして木を往来して忙しくさせるのだろうか。橋のほとりで杖に寄りかかる私と違っ

て。

【語釈】 ○錦春―錦織のような春。○織得―「得」は動詞の後につく軽い助辞。「獲得する」意ではない。○鶯梭―鶯の往来するさまを機織りの梭にたとえた言葉。「柳岸鶯梭巧織藍」(張養浩詩)。

遊奥野銀山宿真繼立齋賦似主人

奥野の銀山に遊び 真繼立齋に宿り主人に賦似す。

節物勿々時易乖 節物 勿勿として 時に乖(たが)い易し
飛紅墜紫與塵埋 飛紅 墜紫 塵と埋まる
主人留客情縱厚 主人は客を留め 情 縦(たと)え厚きも
難奈風光促旅懷 奈(いか)んともし難し 風光の旅懷を促がすを

【詩題】 奥野の銀山に遊び真繼立齋の所に宿り、主人に詠んで似(さ)さげる(詩)

【大意】 四時の変化はあたふたと過ぎてゆき、時期は行き違いやすい。紫や紅色の花びらが翻って落ち、塵となっている。主人である立齋が私を留めるその気持ちは極めて厚くとも、風景が旅の心を急がせることにはどうしようもない。

【語釈】 ○奥野銀山―兵庫県豊岡市。○真繼立齋―真繼至。姫路の医者。柳田国男の祖父。○節物―四時変遷の物色。○飛紅墜紫―「墜紫飄紅」の言い換えか。紫や紅の花びらが翻って落ちる様をいう。「紛紛墜紫又飄紅」(除鉞詩)。○風光―風景。

天橋 天橋

海色蒼蒼晚更晴 海色 蒼蒼として 晚更に晴れ

一聲柔櫓渡煙汀 一聲の柔櫓 煙汀を渡る

月宮此去攀應近 月宮 此に去り攀(よじ)れば応に近かるべし

横架天橋六里青 横に架す天橋 六里の青

【詩題】 天の橋立

【大意】海の色は青々とし夕暮れには晴れた。一声櫓の音が響き霧に煙る汀を渡ってゆく。月は此処から手をのばせるほど近く、天の橋立が横たわる汀は六里ほどの青さだ。

【語釈】○月宮―月の都。月の世界。○天橋―「天の橋立」を省略して「天橋」といった。

王子嶺望天橋 王子嶺にて天橋を望む

外海内湖青幾灣 外海 内湖 青きこと幾灣

天橋一道水雲間 天橋 一道 水雲の間

嶺頭回指經過地 嶺頭 回りて指す經過の地

遮断斜陽四面山 斜陽を遮断す 四面の山

【詩題】 王子嶺で天の橋立を望み見て

【大意】天子嶺から眺める景色は、外海と内湖の青い湾がいくつあるのだらう。一筋の天の橋立が水と雲の間にある。頂の畔から振り返って指で経過した後をたどってみる。夕暮れの太陽を遮断している周りの山々よ。

の山々よ。

【語釈】○王子嶺―天の橋立近くの大内峠のことか。○天橋―天の橋立の省略した言い方。

峰山途上 峰山途上

晝行猶怯熱 昼行 猶お熱に怯え

晚涼初上路 晚涼 初めて路に上る

柳陰水一叉 柳陰 水 一叉

少時可駐歩 少時 歩を駐すべし

【詩題】 峰山の途上にて

【大意】昼間の暑い最中は避けて、夕方の涼しい頃に始めて行を始める。柳の陰で川が二股に分かれているので、しばらくの間歩みを止めて休もう。

【語釈】○峰山―京都府峰山町。○熱―暑さ。○柳陰―西行の「みちのべに清水流るるやなぎかけしばしとてこそたちどまりつれ」(『新古今集』夏)を意識するか。○又―二股に分かれてあること。○少時―①年少の時。②しばらくの間。ここは②の意味。

抵城崎温泉 城崎温泉に抵る

城輿行將近 城輿 行くゆく將に近からんとし

孤筇立翠灣 孤筇にて 翠灣に立つ

渡航客争喚 渡航の客は 争い喚き

村樹鳥連還 村樹の鳥は 連なり還る

涼氣初浮水 涼氣 初めて 水に浮き

夕陽猶在山 夕陽 猶お 山に在り

到來未投宿 到來して未だ投宿せず

燈火各樓殷 灯火 各樓に殷(あか)し

【詩題】城崎温泉に到着して

【大意】城崎への行旅はもうすぐだ。杖を頼りに翠りなす湾のほとりに着いた。どこかへ行く渡航の客は争いわめき、村の木々に泊まるのである。う鳥が連れ立って帰ってゆく。涼しい気配が初めて川からのぼり、夕陽はまだ山の端にある。到着してもまだ宿をとってはいないが、街を見れば家々に灯が盛んに光を放っている。

【語釈】○城崎―兵庫県城崎市。温泉で有名。○畷―山間の平地。平仄の関係で城崎の代わりに用いた。あるいは、畷の間違いか。畷は嶼に同じ。小島。城崎を島にたとえてこのように言ったか。○到来―「来」は動詞の後に着く軽い文字。「来る」意ではない。○樓―二階建ての建物。

城崎客中 城崎客中

波光山色緑霏衣 波光 山色 緑 衣を霑し

恰是東風擬浴沂 恰も是れ 東風浴沂に擬す

獨有詠歸曾點趣 獨だ詠歸曾点の趣あり

水明樓畔立斜暉 水明樓畔 斜暉に立つ(酒樓名栗山翁所命 酒樓

の名は栗山翁の命ずる所なり)

【詩題】城崎温泉の旅館にて

【大意】波の色も山の色も緑色に衣を濡らすかのようで、まるで春風に沂水で風に吹かれているようだ。それは又あの『論語』で言われた曾點が歌いながら帰ったという故事の趣があるが、いま、水明樓の傍らで夕陽に照らされている。(酒樓の名前は柴野栗山翁が命じてつけたということである)

【語釈】○波光―波の色。○浴沂―沂水に水浴すること。『論語』顔淵「浴于沂」。○曾點―魯の南武城の人。孔子の弟子。字は皙。『論語』先進篇参照。○城崎温泉水明樓―現在はないが、後に絵葉書となり「城崎温泉水明樓跡と柴栗山碑但馬」として見ることが可能である。○栗山翁―柴野栗山。江戸中期の朱子学者。讃岐高松の人。古賀精里、尾藤二洲と共に寛政の三博士と言われた。

秋柳 秋の柳

零落秋風感式微 零落たる秋風 式微を感じ

鶯歌燕舞跡方非 鶯歌 燕舞 跡 方に非なり

隋提遊舫誰將繫 隋提の遊舫 誰か將に繋がんとし

彭澤吟筇客獨歸 彭沢の吟筇 客独り帰る

既看殘梢漏霜月 既に看る 殘梢 霜月を漏らすを

無由深翠染羅衣 由無し 深翠 羅衣を染むるに

依依空掛離愁在 依依たり 空しく離愁を掛ける在り

只恨征人期易違 只だ恨む 征人 期違ひ易し

【詩題】 秋の柳

【大意】 落ちぶれたような秋風に王室が衰えるのではないかと感じ、春の鶯・夏の燕、これらは全ていなくなつた。かの隋提での舟遊びは誰がその跡を継ぐのだろう。私は陶淵明の吟杖にならない、たった一人で帰つてゆく。残梢の中に霜夜の冴え冴えとした月が見えた以上は、深緑の色が薄物の衣を染めようもなく、柳が緑を取り戻すことはない。離れるに忍び難くむなく別れの悲しみを引き受けたとしても、遠くへと旅立つ人は再会の約束を破りがちであることが恨めしい。

【語釈】 ○零落―「零」は草の枯れ落ちること。「落」は木が枯れる事を言う。①草木が枯れ落ちること。②落ちぶれること。ここは②。○式薇―帝室が衰え傾くこと。衰微。『詩經』邶風 式薇。○隋提―煬帝が築いた堤防。○羅衣―薄物の着物。○依依―離れるに忍びない様。○征人―遠くへ旅立つ人。

偶成二首 偶成二首

詩何必唐調 詩は何ぞ必ずしも唐調ならんや
書或臨晉帖 書は或いは晋帖に臨まん
詩成好耐書 詩成りて好く書くに耐えん
芭蕉伸大葉 芭蕉は大葉を伸ばせり
倦來立少時 倦み來りて立つこと少時
鴉髻猶在手 鴉髻は猶お手に在り
主人閑風流 主人 閑風流
移竹近戸牖 竹を移して戸牖に近し

【詩題】 たまたまできた詩(其の一)

【大意】 詩というものは必ず唐詩の様なスタイルでなければならぬ、ということもないし、書はある場合には晋代の書に習うこともある。詩は完成して、書くのにちようと好都合に、芭蕉の樹は大きな葉っぱを伸ばしている(その葉に書くことにしよう)。

【語釈】 ○晋帖―書は晋代のものが理想とされる。陸游の「出遊歸鞍上口占」に「得意唐詩晋帖間」という句があり、恐らく此の句を参考にしたのであろう。意味は「唐詩を読み、晋帖を勉強して得意になっている」。

【詩題】 たまたまできた詩(其の二)

【大意】 仕事に倦み疲れ立つことしばし。すきは手にもつたまま。家の主人は暇人で風流な人であり、竹を窓の近くに移し変える。

【語釈】 ○鴉髻―鋤の一種。からすの髻に似る。陸游「採葉常携鴉髻鋤」。○戸牖―まど。れんじ窓。

過某村居 某村居を過ぐ

親朋隱栖地 親朋 隱棲の地
負郭絶喧嘩 負郭 喧嘩絶ゆ
虎耳階前草 虎耳 階前の草
雞冠籬外花 雞冠 籬外の花
夜閑蛩語壁 夜閑かに蛩 壁に語り
秋近月窺紗 秋近く 月 紗を窺う
供給情何盡 供給す 情何ぞ尽きん

園蔬剪露牙 園蔬 露牙を剪らん

【詩題】ある村を過ぎて

【大意】ここは親友が隠棲した土地。城下付近では喧がしきもない。ユキノシタはきざはしの草であり、鶏頭は籬の外に植えられた花。夜は静かでコオロギが壁に鳴き、秋が近いので月が薄衣(カーテン)を通してさし込んでいる。友人が私にあれこれと作物をくれようとする気持ちは尽きることがない。また、畑の菜園でお茶の葉を摘んでくれる。

【語釈】○親朋―親友のこと。「親朋無一字」(杜甫詩)。○負郭―城下付近の土地。○虎耳―ユキノシタ。○雞冠―鶏頭のこと。○蛩―コオロギ。○窺紗―「窺」は覗く。「紗」はうすぎぬ。薄衣を通して覗くさま。○供給―与える。授与する。○露牙―露芽のこと。お茶の異称。

偶成 偶成(吾藩頻年有大喪、句中故及。吾が藩頻年に大喪

あり、句中故に及ぶ)

結髪爲儒士 髪を結び 儒士となるも
十年猶浪遊 十年 猶お浪遊す
身遭宗國感 身は宗國の感に遭い
心抱杞人憂 心は杞人の憂いを抱く
織月初生魄 織月 初めて魄を生じ
高梧早報秋 高梧 早く秋を報ず
兀然何所憶 兀然として何の憶う所ぞ
獨對短檠幽 独り短檠の幽に対す

【詩題】たまたまできた詩(吾が藩では毎年のように藩主が亡くなっている。それ故句中でこれに触れている)

【大意】元服して儒者となったが、十年もの間まだ放浪の身である。私は藩主逝去の愁いに会い、心ではあの杞人と同じ心配を抱いている。細長い月が初めて輪郭のない所を生じ、高い桐の樹は早くも秋を知らせている。私の様な無知な者に何をあれこれ思う所があるうか。たった一人で短い燭台の微かな灯に對している。

【語釈】○結髪―髪を結うこと。元服して成人となること。○宗国―宗主と仰ぐ國のこと。○感―この時期、鳥取藩主が次々に亡くなった。○杞人―杞の國の人。昔、天が崩れ落ちるのではないかと憂いて、寢食を取らなかつたという故事。そこから「無用の心配・取り越し苦労」をいう。○織月―細長い月。三日月などを言う。○魄―月の輪郭のない部分。○兀然―無知な様。○短檠―短い燭台。丈の低い燭台。

早秋 早秋

一雨爽然如覆盂 一雨爽然として盂を覆すが如く
滿園草樹氣初蘇 滿園の草樹 氣初めて蘇がえる
風吹殘露飄芋葉 風は殘露に吹き 芋の葉を飄がえし
植杖秋畦看走珠 杖を植(たて)て秋畦 走珠を看る

【詩題】早い秋

【大意】一雨来てさわやかに、まるでお椀をひっくり返したかの様に、蔬園の草木は初めてよみがえった。風は殘露に吹いて芋の葉をひらひらと漂わせている。私は杖をついて秋の畦で葉の上を走る雨粒

を眺めている。

【語釈】○爽然―さわやかな様。

自立秋筭至二百十日、此日有風。農家大忌之。今秋殊無之。因記

喜(立秋より算えて二百十日に至る。此の日風有り、農家大いに之を忌む。今秋殊に之なし。因りて喜びを記す)

香稻生花千頃繁 香稻 花を生じ 千頃に繁る

紛紛涼露欲黄昏 紛紛たり涼露 黄昏ならんと欲す

秋風二百一十日 秋風 二百一十日

滿路歡聲糶榿村 滿路の歡聲 糶榿の村

【詩題】立秋から数えて二百十日になるこの日、いつもなら大風があるものだ。農家はひどく嫌っている。今年の秋は大風が無かったので、そこで喜びを記すこととした。

【大意】香り立つ稲穂に花が咲き、広い田に生い茂っている。あちこちの涼やかな露の中、いま黄昏になろうとしている。秋風に二百十日。しかし今年には風もなく、道一杯の喜ぶ人々と稲の村。

【語釈】○紛紛―入り混じっている様。○糶榿―稲の事を言う。

九月初三日、大水俄至、重陽後雨猶甚、余時客於村岡、不得歸

(九月初三日、大水俄かに至る、重陽後雨猶お甚し。余 時に村岡に客たり。帰るを得ず)

回風狂雨過重陽 回風 狂雨 重陽を過ぎ

訳注『研志堂詩鈔』選(三)(塩見邦彦)

無復黄花昨日香 復た黄花 昨日の香なし

一淹山城歸未得 一たび山城に淹(ひた)せば 歸ること未だ得ず

家園秋色定蕪荒 家園 秋色 定めて蕪荒

【詩題】九月三日、急に大水がおこり、重陽節の後の雨もひどかった。私はこの時、村岡で旅の途中であつたが帰省することができなかつた。

【大意】重陽の節句が過ぎて風と雨が激しく、菊も昨日の香りはない。山の中の村岡に閉じ込められてまだ帰省の予定すら立たない。故郷の庭は秋めいていても、きつと荒れ果てている事だろう。

【語釈】○村岡―兵庫県北部現香美町村岡区か。○黄花―菊の異名。○蕪荒―荒蕪。草が生い茂り荒れ果てていること。

壽村岡池田壺溪翁六十次韻 村岡の池田壺溪翁六十を壽ぎ次韻

す

淡然老境敢親誰 淡然たる老境 敢て誰と親しまん

興到有時開笑眉 興到り 時有れば 笑眉を開く

健筆縱橫存古隸 健筆 縱横にして 古隸存し

美髯瀟洒見奇姿 美髯 瀟洒にして 奇姿を見る

天資寡欲身無累 天資 寡欲にして 身に累なく

世事不言心自知 世事 言わずして 心自ら知る

佳齡今年已華字 佳齡 今年 已に華字

何疑壽域超期頤 何ぞ疑わん 壽域 期頤を超えん

【詩題】村岡の池田壺溪翁の六〇才を喜び、次韻した詩

【大意】あつさりとした老境で強いて誰と親しくしようというのか。趣を感じ、その時が来たらのびのびと笑う。書は古い隸書を縦横に駆使し、わずかな髭をおしゃれに刈って気取った姿を見る。備わった資質は欲少なく、係累もない。世事の事は触れずにおられるが心の中ではわかつていらつしゃる。あなたは今年六十才。正に「華甲」の歳。寿域に入るのは、百才をお越えになる時でしょう。

【語釈】○池田壺溪翁―不明。○華字―「華」の字を分解すると六つの十と一になり、数え年六十一才の称。○期頤―「頤」は養う意。百才の人。きわめて長寿をいう（『礼記』曲礼上 参照）。

〔付記〕

本稿は、

科研費 基盤研究（C）研究課題／領域番号19K00296

近代山陰地域の文化教養環境における漢詩文の位置 ―若槻克堂と

剪淞吟社の学際的研究（期間 二〇一九～二〇二一年度 研究代

表者 要木純一）

及び、

島根大学法文学部山陰研究センター山陰研究共同プロジェクト

近代山陰地域の文化教養環境における漢詩文の位置 ―若槻克堂と

剪淞吟社の学際的研究（課題番号 一九一三 期間 二〇一九～

二〇二一年度 研究代表者 要木純一）

による成果の一部である。

なお、このたびも島根大学要木純一教授に、多くのご指摘をいただいた。心より感謝を申し上げます。

Kenshido's Selected Poems (3)

SHIOMI Kunihiko

(Professor Emeritus, Tottori University, Former Professor, Shimane University)

[Abstract]

Tekisho Shogaki a.k.a Kenshido (1818-1875) was a poet who lived through the last fifty years of Edo era and early Meiji era. He was Tottori han domain clan. His Poems were published in Bunkyo 1 year (1861). Kenshido poems have the characteristics of regional poetry and also have the characteristics of the late Edo era.

Keywords: Tekisho Shogaki, latter term of Edo era, poem